中学生のコミュニケーションの実態をふまえた国語科教育の創造

——単元「自分に気づく」の実践報告——

渡辺信樹

1. はじめに

伝え合いが成り立つためには、学習者の間に開かれた人間関係が確立されることが前提条件であるとする説がある。また、学習者が、日々の生活の中で生きて働く力として活用できるものでなければ「伝え合う力」を身につけられたとは言えない。指導者は、これらのことを念頭に置いて伝え合う力の育成を図ることとなる。

したがって、実際に教室の中に伝え合いが成立するための開かれた人間関係が存在するのか。存在していないとすれば生徒はどんなところにつまずいているのか、あるいはつまずきやすいのか。また生徒たちはどんなことに悩み苦しんでいるのか。こういった実態を指導者が把握していなければ、伝え合う力を育てる授業は成立しない。指導者は生徒の実態を把握した上で、生徒たちが周囲の人達とよりよい関係を切り結んでいく力を国語科でどのように育てていけるのか。本発表はこういった問題意識を持ちつつ取り組んだ授業の実践提案である。

2. 実践報告

①単元を作るにあたって

コミュニケーションの問題は、生徒の日々の生活の中で大変切実な問題である。ひとたび友人間でコミュニケーション不全が起きると、当事者は学習にも、部活動にも、学級生活にも、果ては校外での生活（塾など）にも大きな影響が及ぶ。（逆に、塾での人間関係のトラブルが学校生活に影響を及ぼすこともある。）しかしこの影響については学校生活の中ですぐに顕在化することは少なく、生徒自身の精神的負担は大変大きいにもかかわらず、心の中にため込んでしまうため、親、教師など周囲はそのことに気づくのが遅れ、生徒が悲鳴を上げるようになって初めて周囲が知ることとなる場合が多い。しかも、いつでも、どこでも、どの生徒でも、この友人間のコミュニケーションの問題は発生する可能性があるのである。

このような友人間の問題が発生したときには、生徒指導の問題としてとらえられ、主に担任が個人指導と学級指導で対応してきたの

がこれまでの学校現場の実情であろう。対策としてもクラスでレクレーションを行って親睦を深めようと取り組んだり、道徳・学活で集団生活のルールを学習する程度のことしか全体指導のとりくみは行われてこなかった。つまり、コミュニケーションの問題は、すべての生徒が関係する問題であるにもかかわらず、個々の生徒の能力を高める手だてを授業の中では組み立てられてこなかったのである。しかも、コミュニケーションのトラブルが顕在化した場合は、個別の対症療法的な取り組みしか行われてこなかった。要するに、個人が直面している問題はすべての生徒に共通しているんだということが認識できる教育を学校教育で行えなかったことが問題である。生徒指導としての個別の取り組みではなく、教科の授業の中で、教室ぐるみで、人が抱えている問題が実は自分にも共通するのだということにまず気づかせる取り組みを行い、コミュニケーションの問題を自分の問題としてとらえるような様々の仕掛けを、学校教育の中でもとりわけ、国語の授業の中で行っていくことが必要であると考え、国語の授業の「伝え合い」に関する単元として立ち上げようと考えた。

②単元の目標

中学生の対人コミュニケーションの実態をふまえて、言語コミュニケーション能力を育成するためには三つの段階を措定して、各段階ごとに取り組んでいかなければならないと考えている。

三つの段階

1．自分に気づく・共通認識を持つ

2．教室に共通認識を持った者が集まった状態の『場』を作る

3．場で自分が言葉を出せる

以上が，稿者の考えている三つの段階である。

1．自分に気づく・共通認識を持つ　が達成できなければ　2．『場』を作ることはできない。この1．と2．は、3．場で自分が言葉を出せるための前提条件である。

いきなり3を目指した授業づくりは無理なので、授業は「自分に気づくこと」を目指した取り組みを行った。生徒のほとんどは集団内でコミュニケーションをとっているとき、自分についてをモニタリングしながら行動しているわけではない。つまり、自分が集団に対してどのように振る舞っているかを普段は意識していないし、客観的にとらえてはいない。これは、一般の社会人も同じであろう。しかし、生徒は、現在、あるいは過去において、自分の思いとは裏腹の行動をとっている自分を意識した経験があるはずである。生徒は、おそらく、自分以外の友達もこういう経験しているとは友人同士で交流していないので、同級生が互いに心の内側でどんなことを考えているかは知ってはいない。

普段は意識の内側に澱んでいる自分に対する思い、あるいは意識すらしていなかった「自分」に生徒の目を向かわせ、ともに考えていこうということがこの単元の目標である。

ここで報告する実践は昨年（２００１年）７月に行ったものである。対象生徒は、稿者が勤務している庄原中学校の三年生２クラスである。三年生を対象にしたのは、稿者が普段、授業を行っている学級であったということと、年齢を重ねている分、他学年より友人とのコミュニケーションの経験や友人観が豊かであると考えられ、

授業の幅が広がることを期待したからである。

③単元「自分に気づく」の展開

学級

3年6組　男子17名　女子18名

3年7組　男子18名　女子17名

④授業の展開

第1次　1時　「小6刺傷事件」記事※（下記注参照）

学習内容

「小6刺傷事件」の記事を読み、加害者と被害者二人の小学生のつながり方について考える。

事件記事のプリントを読んで、加害者と被害者二人の小学生の人間関係の背後にあるものを想像する。

目標

コミュニケーションの問題を象徴したようなこの二人の小学生の関係を考える中で個々の生徒のコミュニケーションに対する捉え方を浮き彫りにしていく。

これから始まるこの単元の学習に関して、授業の目的や、考えていく方向性を明確にする。

授業の流れ

	学習内容	学習活動
導入	本時の活動を知る	コミュニケーションという語の意味を考える

単元構造図

第1次　1時

新聞記事「小6刺傷事件」に対する生徒各自の意見交流（加害者と被害者である2人の小学生のつながり方について）

第2次1時　シール・アクティビティー

仲間づくりの模擬体験
所属感のモニタリング
自己の立ち回り方の確認

第2次　2時

リアリティー
整理・発見
他者との意見交流
自分の姿の確認

第3次　先輩の作文

生徒の心へ直接訴える提起

共通認識の芽生え

自分自身のコミュニケーションの形を確認し、よりよいコミュニケーションを行おうという意欲を持つ

※注

平成十三年六月十日中国新聞の記事より抜粋。

公園で遊んでいた男児が家から持って出た包丁で同級生をめった刺しにした事件。

「周囲の大人からは『仲のよい同級生』と見られていただけに、住民や学校は困惑を隠せない。」と紹介されている。

展開	新聞記事を読み事件の概要をつかむ 話題の中心を探る 二人の児童の関係について考える 意見集約	新聞記事を読む 報道されている内容を整理する 生徒の意見を交流し、問題点を明かにする いつも一緒で仲がいいと思われていた二人の関係について考える 二人の児童の間にどのようなコミュニケーションが存在したのかまとめる
まとめ	伝え合うことの重要性について考える 次時の活動を知る	この二人が言葉で伝え合うとすれば何を言えばよかったのか シールアクティビティーの予告

第2次　第1時　シールアクティビティー

学習内容

数字を使ったアクティビティー。数字を書いたシールを背中に貼り、数が合うようにグループを作る。アクティビティー後、人の動き、自分の心理などについて振り返り、自由に話し合う。

目標

友人とのコミュニケーションの様相について、リアリティーを持って自分に引きつけて考えさせる。アクティビティーを通じて、自分が友達とつながっているときの心理を意識化させる。併せて、身近なクラスの状況や人とのつながり方の仕組みについて振り返らせる。

活動の具体

数字を使ったアクティビティー

1参加者は目を閉じて円になる。

2ファシリテーターは数字を記入したシールを参加者の襟の後ろに貼る。

3目を開けて、数字の合計が3人で100になるように3つのグループになる。ただし、話をしてはいけない。

4一段落したら、人の動き、そのときの自分の心理などについて、自由に話し合う。

シールに書く数字は、次のような組み合わせがある。

（80，10，10）（50，25，25）（90，5，5）（60，20，20）（40，30，30）（70，15，15）（60，30，10）（55，5，40）（80，5，15）（75，20，5）。

参加者は3の倍数になるよう、調整する。

このような活動を仕組むと、普通は、まず自分の数字が気になる。他の人にゼスチュアで教えてもらったりして、自分の仲間を捜す。見つかったら、そこで安心して、まだグループになれない人たちを他人ごととして眺めるようになる。このように、各自が自分ことしか考えていない、という状況だと、スムーズにいかない。

自分のことはさておいて、他の人達を組み合わせていく動きをする人がいたら、早くグループができる。自分以外の数字（いろ）は見えるわけだから。自分のことは誰かが教えてくれる、という信頼感が必要である。

第2次2時　アクティビティーの振り返りと小6刺傷事件意見交流

学習活動

ビデオをの中の自分を客観的な目で見て、自分がどのようなつながり方をしているかを確認し、コミュニケーションが成立するための要素をそれぞれの生徒が発見する。

第1次で書いたそれぞれの意見を交流しながら再考して、「伝えあうこと」を生徒一人ひとりがどうとらえ、どのように改善していくべきか考え、コミュニケーションについての問題意識を持つ。

目標

アクティビティーを行って顕在化した様々なレベルの問題を考え、通じ合うということをより深いレベルで考えるようになった上で、再び小6刺傷事件をとらえ直し、つながりあうということの中身について考える。

第3次　1時　これまでの授業のまとめと意見文執筆

学習活動

これまでの授業で生徒たちが出した意見の整理を行う。

先輩が書いた作文を読み、これまでの学習で考えたことを含めて作文にまとめる。

⑤授業展開の整理・生徒の意見集約

これまでの授業の流れ

1. 小6刺傷事件の二人の背景を考える

二人の少年のつながり ……【客観的】

・イジメがあった　・二人は愛し合っていた

・家庭内で不満があった　等

アンバランスな人間関係の実体 ……【経験的】

・仲良くなると相手の欠点が見えてくる

・見かけだけの友達は結構いる。友達のふりしてただけ

・ちょっとしたことで（嫉妬・誤解）で関係が崩れる

（先生への抗議）

「感想を勝手に載せてほしくない。嫌だという人もいる。このクラスの人間関係がさらけ出された感じ。」

2. 自分のコミュニケーションの実体に立ち返る

○みんなの意見を読むと友達が恐くなる。

○見せかけだけの友達。私は今その絶頂期。

○見せかけだけの友達は私を裏切るかもしれない。

○もし、自分のことを「嫌いだけど無理して一緒にいた。」とか言われたら、すごいショックだと思う。

○「見せかけだけの友達」そう思ってるあなたはかわいそう。

3. コミュニケーションを成立させるための要素

（シール・アクティビティーの反省から）

・協力すること。信じること。

・積極的に動くこと

・信頼できる第三者の情報を得ること

・相手を思いやること

目標

シール・アクティビティーの振り返りと、小6刺傷事件の意見交流を経て、生徒一人ひとりの中に立ち上がってきた内容（つながるための条件、つながり方、友人関係の様々な様相）を、身近な「先輩」が書いたコミュニケーションに関わる作文を読むことによって、「自分とクラスメイトのつながり合い」の問題へと焦点化する。また、「自分の」コミュニケーション（言葉による伝え合い）のあり方について相対化して捉え直すことで、新たなコミュニケーションのあり方を考える契機とする。

3．実践から浮かび上がる生徒のコミュニケーション意識

第1次　1時の授業から

小6刺傷事件の記事から事件を起こした2人の関係を考える中で、ある生徒が次のような意見を出した。

「見かけだけの友達っていうのは結構いるし、本当はその友達がキライッていうのは珍しくない。それでストレスたまってグサッといったとか…。友達のふりしてただけじゃないの？人間関係ってそういうものでしょう。」

この意見を読んで授業者として、「この後の授業はうまく運べる」と直感できた。授業者は、このような意見が出ることを望んでいたところもあった。これを書いた生徒は、自分の周りの友人関係の実態をモニタリングしながら生活していることがわかる。自分の思いを誰にも告げられずにいた時に、このコミュニケーションの授業が行われ、意見を表明するチャンスを得て、ある種のカタルシスを感じながら記入したのであのような投げやりな表現をとったのであろうと授業者は想像している。

第2次の2時および、第3次の授業はこの「見かけだけの友達っていうのは…」の意見を生徒が意識していく授業を展開しようと考えた。

第2次1時　シール・アクティビティー　（省略）

第2次2時　の授業から

「見かけだけの友達…」の意見に対する生徒の反応

約半分の生徒が共通の視点で友人間のコミュニケーションの実相を共通的な視点で見ていると考えられると述べた。多くの生徒がこの意見に触発されて自分のコミュニケーション観を見つめ直している。しかし、すべての生徒を一つの方向に向かせる求心力があったわけでもない。生徒の中には反発の意見も含まれている。生徒の記述の中から、この意見に触発されて書かれたものを分類してまとめてみたい。

支持する意見

「見かけだけの友達は結構いる」っていうのが本当だと思う。今まさに私はその絶頂期。人間は怖いと思う。私も含めて。

見かけだけの友達は結構いるという意見はなるほどなあと思った。見かけだけの友達っていうのは必ずいると思う。本当に仲良くなる人数って少ない。友達づきあいは周りがどう思ってるかで決まるものじゃない。離れたいならはなれればいい。

見かけだけの友達って結構いるというのはそのとおりだと思う。見せかけだけの友達っていうのはけっこういるし、本当はその友達がキライっていうのは珍しくない。という考えは確かにこの学校、教室にある。っていうか、実際に私もだ。人間っていうのは上っ面だけでつきあえる。本当に本当に好きな友達はうらぎらないけど、〝みかけ〟は裏切られるかもしれない。悲しいことだけど、私もされたら嫌だけど、それが現実なのかも。

見かけだけの友達は確かにいる。それは本人しかわからないことなので周りの人から見て仲良しそうに見えるからといって「仲良しだった」とは言い切れない。本当に好きな友達はそんなにいないのでは。

ここに挙げた6人の意見は、二種類に分かれる。一つは、以前から友人間の関係に問題を感じていた経緯が認められる記述である。もう1つは、「そうだったんだ」と気づかされた生徒の記述である。前者は、「見かけだけの友達…」の意見によって眠っていた思いを呼び覚まされたのであろう。後者のように自分の実態に気づいていない生徒にこのような発見を促す授業も必要なのだと考える。おそらくすべての生徒は、「仲間を尊重しよう」「信頼し会える仲間を作ろう」「友達ってすばらしい」などと教えられる授業は受けたことがあっても、「見せかけだけの友達は結構いる…」というような内容を示してリアリティーを持って考えるような授業はかつて経験したことがないであろう。友達関係のことで悩み事ができても、それを相談できないでいる生徒がいるとすれば、こういった授業が行われてこなかったことも原因の一つかもしれない。自分の中ではこのようなことを感じていても、その意識が共通に感じている人が他にもいることが生徒レベルではわかっていないという実態が明らかになった。

消極的な支持

なんかこういうのを読むと友達が怖くなる。本当は相手が自分のことを嫌ってるんじゃないかって。友達とのコミュニケーションは難しい。

みんな考えることは似ていると思った。

いろいろな意見をみたけどすごいことが書いてある。やっぱ心がわかる気がする。

自分が考えつかないような意見や考えがたくさんあって「ああ、そうかもな」と思った。

ストレスがたまったり、見かけだけの友達など、友達関係は難しいと思った。

ここに挙げた5人の意見は、消極的な支持と項目づけしたが、消極的という言葉は、この意見を意識しながら心の琴線にふれるものがあっても、にわかにはすべてを受け容れ難く、とまどいながら記述しているという意味合いである。しかし、これで友人間のコミュニケーション意欲をしぼませてはならない。友達とのコミュニケーションは難しいからこそ、更にコミュニケーション活動は必要なのだという意識を持たせなければならない。

[反発意見]

見かけだけの友達ってけっこういる…　人間関係ってそんなモンでしょうと書いてあるけどそれを書いた人の人間関係ってそんなモンなんか？

「本当はその友達を嫌いというのは珍しくない」というところは共感できるとこだけど、でも「人間関係はそういうものじゃないのか」と簡単に言っていいものなのかなーと思う。自分とみんなの意見が違うのは当たり前だけど、ちょっとどうかなーと思う。もし自分のことをそういわれたり、「嫌いだけど無理して一緒にいた」とか言われたら、すごくショックだと思う。

「人間関係はそういうものじゃないのか」『じゃあ、あんたは友達をずっと疑い続けるのか。最悪！』といってやりたいと思った。それか、『そう思えるあんたはかわいそう』とか。

激しい反発から、とまどいを含めた婉曲的な意見まであった。教育的な見地からいえばこのグループのように、「見かけだけの友達…」の意見は否定しなければならないかもしれない。理想的な友人関係を追い求めなければならないことも十分理解できる。しかし、このような理想主義的で道徳のテキストのような考えが教室を支配すると、友人関係に関する悩みを誰にもうち明けられないし、実のあるコミュニケーション活動は期待できなくなってしまう。また、反発している生徒は、自分の周りのコミュニケーションの実態に気づけないでいるのかもしれない。もしその生徒が自分の言動を周囲の人にどのように受け取られているかモニタリングできないでいるのであれば、それこそこのような意見を交流する事によって、自分自身のコミュニケーションの新しい視点を持てるように援助しなければならないであろう。

[抗議]

感想を勝手に載せてほしくない。本当に嫌だっていう人もいるし。このクラスの人間関係がさらけ出された感じ。

授業者に対しての抗議である。この授業で、きっと傷口に塩を揉み込まれるような思いをしたのであろう。今現在、友人間のトラブルを抱えている生徒は、この授業がつらいものであるかもしれない。無記述で提出した生徒の中にも同じように抗議の気持ちを込めている者がいるかもしれないし、辛すぎて書けなかった生徒もいるかも

しれない。それが「本当に嫌だっていう人」なのかもしれない。また更に、さらけ出すことに抵抗を感じているのであろう。しかし授業者は、この授業はつらい思いを乗り越えられるようになるために必要な授業であるし、将来、自分と人とを切り結びながら人間関係を広げていくとき、必ず力になると考えている。こういう意見が稿者に対して出たことは、次時の授業で他の生徒にも紹介して考えさせることにした。

4. 生徒が書いた作文の考察

①抗議文を出した生徒の作文

感想を勝手に載せてほしくないと書いた生徒は、作文に名前を記入していたので変化を追うことができた。以下にその文章を紹介する。

【先生という人種の方は、よく仲良くしろといいますが、無理なときだってあります。クラスのリーダーみたいで積極的な人は「面倒見がいい、少しうるさいけどいい人」と思いがちのようですが、間違いです。私は正直、彼女が大嫌いです。顔とか身体的なことじゃなく人としていやです。表向きはいい人、明るい人でも友達同士で悪口なんていくらでも（そりゃあ私もいいますが）、いじめのないクラス?笑っちゃうくらい大ウソじゃないですか。アホらしい。シューズ隠し、陰口何でもござれですよ。彼女らにいじめられて隠されたたーくさんのシューズを元に戻しました。それをきっかけに今、同じグループにいますが、重いです。だって彼女たちが私たちの悪口を以前言ってたことなんてバレバレでしたしね。表面だけの友達、まさにこれです。でも一つ言えるのは、私はいじめとかは大嫌いだっていうこと。

私には中2の時からの親友がいます。信用しているし頼れる人です。でも今、私の個人的心の葛藤により、冷たいというかけっこうイヤな態度にでてしまいます。そんな自分が情けなくて大嫌いです。このままいくと友人関係がやばいです。何日か一人でゆっくりする時間が欲しいのです。もしかしたらもう、彼女に嫌われているかもしれません。でも、何とか仲良くしたいです。たまにムカッときても許せる、大事な友達だから。】

クラスの人間関係がさらけ出されたことを強く抗議していた彼女であったが、今回は自らが積極的に自分の人間関係をさらけ出した作文をはき出すように書いている。先輩の作文に触発されたのは間違いない。授業者に対しては作文という形で自分のコミュニケーションの実態を示したということは、共通認識を持って同じ地平に立とうという気持ちが立ち上がったということである。

②早い段階から見かけだけの友達は結構いる。友達のふりしてただけ。という意見に賛同していた生徒の作文。

【人との人間関係というのは、自分が相手を信じることから始まると思います。常に相手を疑ってばかりの人は、相手に信じてもらえません。関係が崩れるときも、きっと相手のことを疑ってしまう時というのがあると思います。今回の授業で「見かけだけの

友達」っていう話題があったけど、それは人間である以上誰にもあることだと思います。大人だってお世辞を言う、付き合いだから、などと言って上っ面だけの人間関係があります。子供にとっての学校、友達というのは、大人にとっての社会なわけで同じことがあっても不思議ではないと思います。だから、「こんなことを思っている人がかわいそう」なんていってる人は、よほど人間関係に恵まれているんだろうな、と思います。

私も2回、人間関係で悩んだことがあります。一度目は私が悪かったので心に整理がついたけど、二度目は板ばさみ状態で自分ではどうしようもありませんでした。自分のことを信じてくれている人がいるけれど、私はその人のことを信じられないこともあり、自分自身が嫌になることもたまにありました。そういうこともあり、私はそれぞれの人間関係について、すべてを信じられるという人はいないと思います。ただ、自分からすすんで人を信じていかなければ、その人も心を開いてはくれないわけだし、そのまま見かけだけの友達になってしまうかもしれません。自分が相手を信じて相手も自分を信じてくれたら、それが本当の友達だと思います。】

この文章を書いた彼女は、友人関係のトラブルを発端として、一年生の後半から約半年の間、中学校に登校してこなかったという経験を持っている。それだけにこの問題は敏感に感じているはずである。彼女のいうように、人間関係にトラブルが起きると、自分一人ではどうしようもない状況が発生する。そこで、一人で悩んで袋小路に入り込んでしまうことになる。このような経験を通じて人間関係のスキルを学んでいくという一面もあるが、ここで必要なのが、共通認識であろうと思う。友人間、クラス内にコミュニケーションの構造について共通の認識があれば、周囲の人間関係の中から救いの手がさしのべられる可能性も増えるわけであるし、孤立感も軽減されることになることか期待できるであろう。

5. 今後の課題

本単元を行って明らかになったことは、生徒たちはこれまでの経験の中で、話し合いを通して心から通じ合ったと実感したり、より解決に導いたという経験をほとんど得ていないという事実である。このままの状態の中、国語科で「伝え合う力」の育成をねらった授業を行っても、上滑りしてしまうだけである。

一方、広島大学国語教育学会での本発表に対する質問の中に、「この実践は国語科の授業か?」という投げかけがあった。指摘のとおり、本実践には国語科において養うべき力と、道徳、特別活動の範疇の内容が未整備なまま混在している部分がある。今後この課題を整理してまとめていく必要があると考えている。

同時に「伝え合う力」の本質は何かということも、様々な角度から検討していかなければならない問題であると考えているところである。

6. 終わりに

最後に、私のつたない実践を発表させて頂く場を与えてくださった、広島大学国語教育学会の諸氏に対して、深く感謝申し上げて、本稿を閉じたいと思う。

（広島県庄原市立庄原中学校）